博士論文要旨

精神医療改革運動期の看護者の動向

立命館大学大学院先端総合学術研究科
先端総合学術専攻一貫制博士課程
阿部あかね（あべあかね）

本研究は、戦後から 1980 年代の精神医療体制が再編・構築された時期に、精神医療をめぐり起こったことと、その中で精神医療の中心役割である精神病院の日常運営の様子を、精神科看護者の動向を加え記述するものである。

1960 年から 1980 年代、わが国の精神医療は戦後の壊滅状態から、新しい精神医療体制を再編しながら急激な復興を遂げ、今日に至る。しかし批判も多い。特に諸外国の脱施設化の流れに反した過剰な精神病院の設置は、その後の隔離収容主義や入院の長期化をもたらした。また、精神病院が持つ閉鎖性が病院内部で様々な不祥事を引き起こし社会問題化した。急激な精神病院の設置、治療方法の変化、高度経済成長や学生運動といった社会情勢の影響も受け、1960 年代末に精神科若手医師らを中心とした精神医療改革運動が起こり精神医療は大きく揺さぶられる。これ以降、戦後精神医療の問題点が次々に指摘され議論された。これによって見直され、改善された点も多く、この運動が精神医療にもたらした影響は大きい。しかし、結果として 30 万床という過剰な精神病床数を抱える精神医療体制は今日まで続いている。

一方、これら激動する精神医療事情の中で精神病院内部はどのように運営されてきたのか。急激な増床とともに増えた入院患者の生活を支えたのは、精神病院職員の中でも最も多勢である精神科看護者である。この点は見落とされてきた。看護者が精神科看護業務を通して精神病院の日常をどのように運営してきたのかについては明らかにされていない。

そこで本研究ではまず、戦後の精神医療体制の再編の過程と、そこに精神科看護者が組織化され、専門職として身分の確立を目指した過程を併せて記述する。そしてその専門職である精神科看護者が〝生活療法〟を精神科看護の拠り所として取り組んだ様を記述する。その日常が精神病院急増時代から低人数職員で運営される今日までの精神病院を支えたのである。次にこの時期に精神医療における特筆すべきこととして精神医療改革運動に着目し、その始まりと、やがてそれが行きづまったことで反精神医学を参照し、新たな方向性を模索した精神医療の動向を記述する。そして、精神医療改革運動の中で生活療法批判が起こるが、それに対する看護者の応答の仕方を記述し、精神医療改革運動が精神病棟の日常と、その日常を担った精神科看護にもたらした影響を考察した。

結論として、精神科看護者は批判を一部受け止め、反省したことで患者の人権を意識的に尊重する風潮が浸透した。しかし精神科看護技術としての生活療法は手放さず、精神病院内部では方法を変えて今日も継続されている。このように精神医療改革運動によって、患者の処遇や自由度は改善され、問題意識が持たれるようになったという意味で精神病院内部の環境は変わったといえる。しかし、増床しすぎた病床数の削減や、強制入院制度、長期入院患者の存在、地域医療福祉体制整備の遅れなど精神医療体制は、今日も変わっていないといえる。